

日本の霊水信仰に対する一考察（Ⅰ） 〔禊の信仰〕

廣 部 重 紀

A consideration to the belief of ghost water in Japan (1) (The belief of Misogi) Shigenori Hirobe

The belief of Misogi can also be seen in other religions in the world. In our country the event of Misogi was held and believed from the old days. It was held when we wish the coming of God and when we are given showing of the appearance of God. Many kinds of “stain” will be taken off by the cleansing power of water. The revival of ghost is desired. It's necessary for the ghost to begin the new activity. The meaning and signification of this Misogi is stated by the research of each literature including Koziki, Nihonshoki and so on.

1. 序 文

我が国では最も真剣な、最も正しい生活に入らんとする時必ず行なわねばならぬと信じられて行なって来た行事がある。禊と祓の行事である。元来日本人が清浄を尊ぶ国民である事は多くの人々によって既に言われている所であり、好んで毎日入浴する事でも解る。その上日本民族は敬神觀念の頗る強い民族で、日常の生活は神の御慮のまにまに行なわれるものと信じていたのである。神慮を受けんとするには先ず神を敬い神に近づく必要がある。ここに神祭や神事が常に繰り返えされる。祭祀や神事は日常生活のあらゆる場面と密接な関係を持っていたのである。皇室の諸行事を初め国家的社会的な生活全般の事柄、単なる自己の朝夕の行事に至るまで神慮によらぬものは一つもないと考えていたのである。神は常に清浄を悦び汚穢を忌み給うものなるが故に、人々も自ら心身の清浄を貴び汚穢を忌む觀念が旺盛となり、清き明き直き誠の心を常に保持して極めて明朗快活な生活を営まんとする心構えを有した。更に進んで神人一如の境地に達し、向上進取の生活意識を堅持しようとする信念が生ずるに至ったのである。

古代人が抱いた水の觀念として重要な意義のあるものは水の持つ清浄力の考えである。水に清浄力のある事は言うまでもないが、古代にあっては水は種々の汚れを祓除き聖化する霊力があるとされていた。その汚穢・罪障を除却して清浄なる心身を保たんとする努力が行動の上に現われたのが禊である。

2. 禊の起源

禊とは身滌ぐ事で水をもって心身の穢を滌ぎ落す行事である。禊の本来の意義を文献により列挙してみると

倭訓栞

みそぎ、祓除をいふ。神代紀にみそぎはらひとよめり。みそぎは身滌也。万葉集に身祓とも禊身とも書けり。普書に身潔に作れり。身濯の義也。出雲風土記御身沐浴と見ゆ。日本紀に潔身をみをさやめとよめり。(注1)

古事類苑

身体を洗滌するの義にして、凶穢を除き吉祥を求むるに外ならず。故に禊を稱して祓となす。

(中略) 伊弉諾尊の祓の後に海潮に入りて御身を滌ぎ給ひしは即ち禊なり。(注2)

と文献にあり「大祓詞後釋」や「神祇辞典」にも「禊は水辺に行き、身体に付着する穢を洗滌することである」と述べている。

禊は元来世界何れの民族と雖も古代においては水をもって心身を清めんとして、我が禊の行事と同じような行事を行っていたと思われる。代表的なものをあげると、インドの婆羅門は恒河に浴して罪を滅し、聖道を得たと言われるし、キリストはヨルダン河においてバプテスマを受け、水より上り神の子たることを認められたのである。なお中国においても3月3日の曲水、5月5日の端午節句等の行事を行うが、これも禊の思想と一脈相通ずるものがあると思われる。その他南アメリカインカ王族の病魔の祓、シベリアシャAMAN教の禊祓、エレウシス教(ギリシャ宗教内の一種)、ゾロアスタ教(ペルシャ)、ユダヤ教、仏教(密教)等にもみられる。

我が国において文献に現われた最初のものとして、「古事記」及び「日本書記」の神代巻に、伊弉諾尊が伊弉冉尊の御跡を追わせられて黄泉国に到り給い、不浄醜惡の所であるとして逃げ帰って、筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原において祓除い給うて、御身に付着した穢を洗い清められたと記している。伊弉諾尊は日向の橘の小戸の櫛原において上瀬は是れ太だ疾し、下瀬は是れ太だ弱しとおっしゃって中瀬に濯ぎたもうたのである。その時に八十枉津日神が先づ生まれ出で給うが、次にその枉を直さむとして神直日神と大直日神とが生まれた。更に尊は海の底に沈んで濯ぎ給い、その時に生まれた神が底津小童命、底筒男命、次に潮の中に潜き濯ぎたもうて生まれた神が中津小童命と中筒男命である。潮の上に浮き濯ぎたもうて生まれた神が表津小童命と表筒男命で、凡て九柱の神であった。然る後左の眼を洗いたもうて生まれた神が天照大神、右の眼を洗いたもうて生まれた神が月読尊、更に復鼻を洗いたもうて素戔鳴尊が生まれたと伝えている。

以上の記事を初見として古史に禊に関する記事の多くがのせられている。それが何れも自己の身体に着いた穢を洗い去らんとする行事である。しかし、これら行事が単なる穢を除くためのものであるとのみ解するのは当を得ないと思う。その事については後述するが、要するに禊の行事は祓の行事とは反対に積極的な行事を主としたもので、穢を滌ぎ去るという消極的方面は、積極的行事に向わんとする単なる道程に過ぎないと思うのである。

3. 禊の理論

凡そ人間が自己の心身に着いているあらゆる罪穢を排除して、極めて清浄なるものにしようとの観念は古くインドにも、ユダヤにも又中国の習俗においても同様に見られた所で、独り我が国にのみ存した訳ではなかった。特に我が国においては力強く意識せられ、遂には国民性の重要な構成要素とさえ考えられる程重要な部分を占めたのである。故に我等の祖先が神に近ずき、神と通交せんとする時、準備的行為として心身を清浄にするために身滌ぎの行事を行ったのは当然であったといわねばならない。伊弉諾尊の禊は一般に黄泉国の穢を祓うために行われたと解せられているが、この伝説は前後兩段に区別して説かれるのが普通であると思う。前段は伊弉諾尊は伊弉冉尊が神去りまして黄泉に赴かせられたのを嘆き慕いて、伊弉冉尊の跡を追うて黄泉に入り給い「不須也凶目穢之國に到つ」と詔うて急ぎ走り帰り給い、身の汚穢を滌ぎ落さんとして行われた行事と考えるべきである。後段は天照大神、月読尊、素戔鳴尊の三柱の神の御出現に関する部分である。伊弉諾尊が禊を行われて最後に左の眼を洗って天照大神が出現し、右の眼を洗って月読尊が、鼻を洗って素戔鳴尊が出現したと伝えている。つまり三貴子を産まんとしたことを明示しているのである。しかも禊の重点は後段にかけられたのであると見るのが普通であらう。身体を水で清めるという以上必ず清浄に対する不浄の存在を意識していた筈である。その不浄の例証として黄泉国が持ち出されたのであって、この前段が重要な部分であると考えするには、あまりにも後段の記事を軽く扱い過ぎると思う。本居宣長も「世の中のあらゆる吉喜事は皆此の御禊より起るものなり〔日の神(天照大神)の成坐せる所、考へ合すべし〕」(注3)と説いて、暗に天照大神御出現のために禊が行われたかの如き事をほのめかしているが、完全に大神の御出現をこい願わんがために行ったとは語っていないのである。しかし松岡静雄は「禊伝説は皇祖神たる天照大神及び月読尊の御出現を説くを主眼とした」(注4)と述べて、宣長の説より一步前進したかの如き感がある。これは伊弉諾尊の禊伝説は黄泉の穢を祓うという消極的な行為が主眼でなく、禊によって我が国最高至貴の神である天照大神の御出現をこい願わんがために行われた積極的な行事であると断言してよいと思う。

海神の女豊玉姫が、海神の宮の門前の井に玉器をもって水を汲まれたというのも、彦火火出見尊の来現を待っている禊の行事を表わしたものと思う。また神武天皇が丹生の川上に諸神を祭り給うたのも河の辺であり、伊勢の皇大神宮の御鎮座も五十鈴の川上である。豊受大神の旧御鎮座地の丹波の眞名井も比沼山のふもとから湧出する清水の溪流の辺であり、伊勢の山田においては、宮川の辺に御鎮座になっている。なお京都の賀茂御祖神社の御祭神玉依姫命が、賀茂川に出でて、水を汲み神に手向けられたという伝説も、別雷神の来現を念じて行われた禊の物語と見るべきだと思う。特に賀茂川は後世まで禊川として有名となり、玉依姫命の禊によって出現せられた別雷神も等しく賀茂川の水を斎川水(産湯)として用いられて以来、諸人がこの河水に禊をして、賀茂別雷神社に参詣し、祭を行ったのが「みあれ祭」の本義である。平安時代以来、伊勢の斎宮、賀茂の斎院の禊を初めとして、夏越祓などが常に賀茂川において行われたのも、賀茂川が別雷神と特殊の関係に立つ所から、禊の瀬と定められた結果に外ならない。このように古来の神

祭に多く河の辺が用いられたのも、禊が神祭と不可離の関係を有していたためである。

以上論述して来たごとく、禊の行事はまず神の来現をこい願わんとする時に、各自自らの心身を清め、頗る緊張した気分のもとに神人一如の境地に入らんとする時、また神の出現によってその啓示を受けんとする時に、必ず禊を行ったのである。同時に考えるべきは人々が新生活に入らんとする時、もしくは新しい事件に直面する場合にも必ず禊が行われた事である。ここにいう新生活に入るといのは霊の復活、甦生を希求してその甦生した霊の新たな活動を開始することを意味する。新しい事件に直面する場合にもその事件を完遂せんとするには必ずや甦生した霊力の活動を必要とするのである。かような霊や霊力というのは自己の心身内に潜在する直昆霊をさすので、その直昆の霊力の拡充と発展とを意味するのである。この意味において前述のごとき場合に禊を必要としたのは当然と考えるのである。

神宮皇后が神の啓示のまにまに三韓征伐をしようと決意なさった時に、檀日の浦に行き髪を解きて海に臨み給い

吾被神祇之教頼皇祖之霊浮涉滄海躬欲西征。是以今頭滌海水若有驗者髪自分爲兩。(注5)

と仰せて海に入りまして洗ぎ給うたが髪自ら分れたので、皇后直ちに分髪を結って髻にせられたと記されている。この記事は一面にはト占の意も含まれているが、明らかな事前の禊であったと解するのが当然であろう。天照大御神と素戔鳴尊との誓約が天真名井において行われたと伝えられるのは、明らかにかかる重大事を決せられる前提として、両神が天真名井にて禊が行われたことを暗示しているのである。なお同種の事例を古書に求めるならば数限りなく出てくる。たとえば「日本書記」履中天皇五年冬十月の條に、

爾雖車持君縦檢校天子之百姓罪一也。既分寄于神車持部兼奪取之罪二也。則負惡解除、善解除、而出於長渚崎令祓禊。既而詔之日、(注6)
とあるごとくである。

さて、ここに問題とすべきは禊の料となるべき水である。元来水には一種の霊力が存するとの信仰が古くからあった。古来水に関係ある神名が多く挙げられているのを見ても了解出来るのである。すなわち神代七代の神の内には角織尊、活織尊の二柱の神がある。この両神は我が国神話中最古の水神である。これを初めとして速秋津日子神、速秋津比賣神、沫那藝神、沫那美神、頼那藝神、頼那美神、天之水分神、国之水分神、天之久比奢母智神、国之久比奢母智神、伊豆能賣神、菊理媛神、小童命、筒男神等が数えられる。その他「延喜式神名帳」には生井神、福井神、網長井神等がある。かく多数に水に関する神が存するのは古来我民族に水に対する固有の信仰があったためであるが、これに古くからの外来信仰が加わって益々それを助長したと考えられるのである。

以上述べた所を要約してみると、禊の行事は祓の行事と表裏一体密接不離の關係に立つものであるが、祓は消極的の行事であり禊は積極的の行事である。だからこそ大神格の来現を希求せんとする時、また新事業に直面する時はまず祓行事を修し、しかる後禊を行って水の霊力により心身の

清浄を期し、その生命力即ち心身内に潜在する直昆の霊の限りなき拡充と発展とを基とする霊力の活動を刺激してその甦生復活を計り、絶えず生気の旺溢した霊力をもってこれに当らんとするのである。即ち禊祓の行事は神の来現啓示によって、各自の生成発展への本当の力を把握して新事態に即応すべき心構えを完成しようとするものである。

4. 禊 の 実 際

禊の実際の記事は伊弉諾尊が伊弉冉尊を慕い給うて黄泉に到り給い「吾は前に不須也因目汚穢之處に到りき、故れまさに吾が身の濁穢を滌い去てむ」と詔うて筑紫の日向の橋の小戸の櫛原に到りて禊祓いを行い給い、身の汚れを滌ぎ清め給うたという記事をもってその嚆矢とする。古事記・日本書紀の両書共に明かにこれを伝えている。古事記の記事と日本書紀一書六の記事とは、ほとんどその伝承の内容を同じくし日本書紀一書十の記事は多少趣を異にしているが、それは「記」および「紀」の一書六の記事は同一系統の説話をもととしたのであり、「紀」一書十の記事はその伝承の相違から生じたためであると思われる。なお「記」および「紀」一書六の内容を子細に検討すれば多少の喰違いが存しているが、これは両者の伝承の際に生じた誤りと見るべきであると思う。「記」と「紀」一書六との各伝承を表示すれば下記のごとくである。

【古 事 記】

| 《装身具》 | 《神 名》 | 《装身具》 | 《神 名》 |
|---------|-----------------|---------|-------------------|
| ・御 杖 | 衝 立 船 戸 神 | ・御 帶 | 道 之 長 乳 齒 神 |
| ・御 裳 | 時 置 師 神 | ・御 衣 | 和 豆 良 比 能 宇 斯 能 神 |
| ・御 禪 | 道 俣 神 | ・御 冠 | 飽 咋 之 宇 斯 能 神 |
| ・左御手之手纏 | 奥 疎 神 | ・右御手之手纏 | 辺 疎 神 |
| | 奥 津 那 藝 佐 昆 古 神 | | 辺 津 那 藝 佐 昆 古 神 |
| | 奥 津 甲 斐 辯 羅 神 | | 辺 津 甲 斐 辯 羅 神 |

【日本書紀一書六】

| 《装身具》 | 《神 名》 | 《装身具》 | 《神 名》 |
|-------|-------|-------|---------|
| ・御 杖 | 岐 神 | ・御 帶 | 長 道 磐 神 |
| ・御 禪 | 開 嚙 神 | ・御 衣 | 煩 神 |
| ・御 履 | 道 敷 神 | | |

川口に身滌ぎ給いし時に生りませる神

| 日本書紀一書六 | 古事記 |
|---------|--------|
| 八十枉津日神 | 八十禍津日神 |
| | 大禍津日神 |
| 神直日神 | 神直毘神 |

海に身滌ぎ給いし時に生りませる神

| 日本書紀一書六 | 古事記 |
|---------|--------|
| 底津少童命 | 底津綿津見神 |
| 底筒男命 | 底筒之男命 |
| 中津少童命 | 中津綿津見神 |

大直日神

大直毘神

中筒男命

中筒之男命

伊豆乃賣神

表津少童命

上津綿津見神

表筒男命

上筒之男命

上記の内装身具は当代高貴の人々の用いられていたものであると考えるが、禊のためにもまずこれ等の装身具を上記の順序をもって脱がれたと見るべきであると思われる。各装身具に神名をつけているが、上記の内黄泉との関係を持つと思われるのは、杖を衝立船戸神という位である。これは黄泉よりこの国土に幽鬼が侵入せんとするのを防がんとする観念のもとに、杖の持つ霊異の威力を信じて、この威力によって幽鬼を防ぎ得ると考え、その出入口と思われる地点に立てたのであろう。なお穢と一脈の関連を持つと思われるのは衣を煩神と名付けたことである。恐らく衣は最も穢に染み易いものであるから、これが万の煩の本源となるを考え、黄泉の穢も衣に付着するとして煩神と稱したと思われる。その他の装身具に対する神名は多く存するが、これ等は禊にも黄泉にも何等信仰的關係が見いだし得ないので、単なる文章の修飾であらう。

伊弉諾尊は橋の小戸の櫛原において身を滌がれたのであるが、まず川口に降り立たせ給い川の瀬をよく見て「上瀬は是れ太だ疾し、下瀬は是れ太だ弱し」と詔うて中瀬に滌ぎ給い、その時に生れ出でました神名に対して「記」はまず八十禍津日神と大禍津日神との二柱の神が生れ給い、この二柱の神はかの穢き繁国に到りました時の汚垢によって成りませる神であると記し、次にその禍を直さむとして成り出でました神が神直毘神と大直毘神と伊豆能賣神であったとしている。しかし「紀」には中瀬に身滌ぎ給うて生りました神は、八十枉津日神と申し、次にその枉を矯さむとして生りませる神が神直日神と大直日神との二柱の神であると記している。これは「記」の所伝のごとく枉津日神が二柱と直日神が二柱とするのが正しい伝えであると思う。伊豆能賣神に対しては本居宣長は「伊豆という詞は既に汚垢を滌祓いて明く清まりたる意にて、明津の約りたる言葉であり神を祭るに際して斎清浄める意を表わし、この神は禊によって穢悪き麻賀を神直日大直日に直し清めて、直く清く明くなれる御霊である」(注7)と述べ、松岡静雄は「伊豆能賣は他に所見がないが語義は嚴之女で、神武紀に斎王に任ぜられた道臣命に嚴媛という称号を授けられたとある所を見ると、神霊に奉仕する女性を意味するものと思われる。恐らくは祭祀のためには必ず一女性を必要とする古俗が存したので、神武天皇は陣中女人を携えておられなかったため道臣命に女名を与えて代任せしめられたものと思われる」と述べている。

以上二人の説のように、伊豆能賣神は元来は伊豆能賣といって神の字がつけられていなかったのを後に神の字を加えたのである。そして古くは直日神を祭祀するための一女性の霊格として後に付加せられた神であると見るのが正しいと思われる。古代の祭祀には必ず一女性を必要とした習俗が存したので天照大御神の御前に大宮賣神が待ったのもその思想から出発したのであろうし、豊鍬入姫命や倭姫命を初め代々の皇女が斎宮として奉仕したのもその思想の延長であり、また神を祭る女性は第三者より見る時は、その祭られる神と同様の神格を有すると感ぜられたと思う。伊豆能賣神が直日神に配せられるようになれば直日神と同様の神格を有している神と考えられ、その結果宣長の如き神名の解釈が行われるようになったのも不思議な事でない。

更に伊弉諾尊は進んで海に出で給い、水底に滌ぎ給うた時に底津少童命と底筒男命とが生れ出で給い、中に滌ぎ給うた時に中津少童命と中筒男命とが生れ出で給い、最後に水の上に滌ぎ給うた時に表津少童命と表筒男命とが生れ出で給うたと記されている。これ等の行事の上に生れ出でた諸神の中で最も必要な神は枉津日神と直日神の出現である。その中でも重要な地位を占めているのが直日神で、人間の霊の最も正しい最も直き現れである。その霊が体内に充実して無窮の発展を期せしめんとする所に禊の行事の真の意義が存するのである。かくて伊弉諾尊は最後に左の眼を洗い給うて天照大御神が、右の眼を洗い給うて月読尊が、鼻を洗い給うて素戔鳴尊が生まれたと伝えている。この三貴子の御誕生こそ伊弉諾尊の真の目的であったのである。

伊弉諾尊は橘小戸の櫛原において禊を行われたが、現在の禊の場合の指導者即ち道彦と稱する者が存在するごとく、その指導を行われた神が存在したと思われるのである。日本書紀一書十の禊の段を叙した所に、伊弉諾尊が伊弉冉尊に対して「吾 興_レ汝 已 生_レ国 矣。奈 何 更 求_レ生 乎。吾 則 當 留_二此 国_一不_レ可_二共 去_一。(注8)」と詔わせ給うた時に、菊理媛神が何事か伊弉諾尊に申し上げたために伊弉諾尊が聞し食して、善め給うて黄泉を立去られ、それより橘の小戸に帰り給うて祓濯がせ給うたと記している。果してこの時に菊理媛神が何を申されたか判らないが、その神名「キクリヒメ」の「キ」は「ク」の音変化であって「ククリヒメ」で、それは「潜姫」であって水中を潜る方法を熟知し、それを指導せられた神であると思われる。このように考えた時伊弉諾尊が菊理媛神の御言葉をお聞きいれになったというのは、おそらく黄泉国を離れて早く禊をせられ貴子の御誕生を待たれるよう申し上げ、その進言のままに伊弉諾尊が禊せられたのであろう。しかもその禊における水中の動作その他一切の行為は菊理媛神の指導によられたと思われるのである。折口信夫も「いざなぎの禊に先だってよもつひら坂に現われて『白す言』あった菊理媛（日本紀一書）は、みぬま類の神ではないか。物語を書きつめ或は元々原話が錯倒しているため、すぐ後の櫛原の禊の條に出るのを平坂の黄泉道守の自言と並べたのかも知れぬ。その言う事をよろしとして散去したとあるのは、禊を教えたものと見るべきであろう。くくりは水を潜る事である。泳の字を宛てている所から見れば神名の意義も知れる。くくり出た女神ゆえの名であろう。いざなぎの尊ばかりの行動として伝えたため、此神は陰の者になったのであろう。(注9)」と述べているが、それについて考えられるのは「ミヌマ」の存在である。「ミヌマ」なる語は「水沼」「三瀨」とも記し、また「ヒヌマ」「ミヅマ」「ミヅハ」「ミヌハ」「ミヅメ」「ミヌメ」「ミルメ」「ヒヌメ」などとも稱していた。「ミヌマ」とは水に縁の深い何物かであるということは想像せられていたのであるが、「ミヌマ」が禊と不可分の神女であり、禊の指導或は介助をするということは、早く已に忘れられたかの如き感がある。出雲国造神賀詞の中に「若水沼間」というのは禊を幫助する女であると前述したが、その基礎となる観念は出雲風土記の中に存するのではなからうか。出雲国仁多郡三澤郷「…阿遲須根高日子命…爾時、何處然云問給、即御祖前、立去出坐而、石川度、坂上至留、申_二是處也_一、爾時、其澤水活出而、御身沐浴坐、故国造神吉事奏、參_二向朝廷_一時、其水活出而、用初也依_レ此、今産婦、彼村稻不_レ食、若有_二食者_一、所_レ生子已不_レ云也、故云_二三澤_一」(注10)」とある。即ち味耜高彥根命は三津において禊をし給う

たのであるが、それは水沼の介添えによって行われたのである。その御行為を古事として神賀詞に奏上し、その若き水沼のごとく天皇には益々若返り給うということを祝福し奉ったのである。その他「日本書紀」神代巻、天照大御神と素戔鳴尊との誓約の段一書三の「以日神所_レ生三女神_一者、使_レ降_一居于葦原中国之宇佐島_一矣。今在海北道中_一。號日_一道主貴_一。此筑紫水沼君等祭神是也。(注11)との記事中に、筑紫の水沼君とあるは宗像の三女神を祀る家筋であるが、それが水沼と稱したのは前記の味鋌高彦根命の沐浴の時と同じ役目を持つ家筋と見られる。かくてこれら禊を介助する神女が、上瀬、下瀬を選び迷うた後に中瀬を好適の場所であるとして水浴をする。その振舞によって禊の場所を定めその指導によって禊を行なうのであると解する。この「ミヌマ」「ヒヌマ」等の思想が漸次ひろがって、丹生とか壬生部とかの如き家職の家が出来、遂には天皇の節折に出る中臣女にまで変化し、また産場の業を司る家筋なども生じたのである。かくして禊の時に現れる神女水沼の介助の行為は、我々の日常生活にまで織込まれたのであると思われる。以上伊弉諾尊の禊の一切の行為は菊理媛神の指導によらせられ、枉津日神、直日神の出現はその御声によって表されたのである。上瀬・中瀬・下瀬、底・中・表の身滌は、それぞれの禊の行法の記述であり、行法の一つ一つを神名をもって表わされたのであろう。

む す び

上記のごとき水の清浄力に対する信仰は、我国にあっては神道の中に多く取り入れられ、かつ長く残っており、禊祓は神道における重要な儀式である。今日人々の知るごとく神社の前に手洗水舎のあるのは禊祓の意義を有するものであり、伊勢神宮においては手洗水の水槽を出さず、五十鈴川の流れによって洗い清める事等は流水、自然水による方が特に効力ありとされた例であろう。また飲食店の前に塩の盛られてあるのを見る事も、禊の信仰の転化したものであると思う。ここにも日本民族の清浄を好む習性がうかがえるのである。

【注】

- | | |
|--------------------------|-----------------------------|
| (1) 「国教」昭和12年度(96号)八月号 | (2) 「古事類苑」神祇部2, 659頁 |
| (3) 本居宣長全集第1巻302頁 | (4) 「紀記論究」神代編二諾二尊, 149～194頁 |
| (5) 日本古典全書日本書記2, 207頁 | (6) 日本古典全書「日本書記」3, 98頁 |
| (7) 本居宣長全集第1巻300～301頁 | (8) 日本古典全書「日本書記」1, 85頁 |
| (9) 折口信夫全集第二巻93頁 | (10) 日本古典文学大系「風土記」226頁 |
| (11) 日本古典全書「日本書記」1, 100頁 | |